

# 政策にエビデンスが必要かどうかは国民が政策に何を求めるかによる

山口一男

シカゴ大学教授、RIETI客員研究員

RIETI EBPM シンポジウム

2023年9月8日

- Alice: Would you tell me, please, which way I ought to go from here?

The Cheshire Cat: That depends a good deal on where you want to get to.

---ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』より

- **EBPM**自体は「モノ」でそれ自体に「どこに行きつきたい」という意志はない。それを使う「ヒト」の意志で、「どこに行きつこう」とするのかが決められる。では、まずどこに向かうべきか？ 筆者はそれは**EBPM**のレジティマシー (**legitimacy**)を獲得することで、より具体的には**EBMP**の「質」と「社会的価値」を高めることあると考えるが、それには多くの障害がある。

# EBPMの「質」と「社会的価値」への障害

## 問題1ーエビデンス自体の選択バイアス

- ①政治によるPBEM (Policy-Based Evidence Making)
- ②行政による政策の「お手盛り評価」
- ③学者による既存研究引用バイアスや、査読審査バイアス
- ④クリーミング (病院が統計上の癌の治癒率を高めるため、重症癌患者をひきうけないなど)

- 原因：利用者の利害計算による自己正当可
- 注：データ捏造など、データ不正は論外なので入れていない。

## 問題2ーエビデンスの妥協

①アウトカムでなく、アウトプット（これこれのことに予算を投じ、何をしたなど）による成果の評価

②記述統計・相関統計の「エビデンス」への利用

例えば個人評価に属性（性別、人種、年齢など）を用いる統計的差別。特にビッグ・データの相関統計の利用（ビッグ・データには因果関係を推定できる変数が通常全く含まれていない）。

具体例：

① アウトカムへの影響を測るのが難しい状況での行政のアウトプットを重視する（名目的）

業績主義よる、国や地方自治体の費用のかかるイベント興行など。

② AIソフト利用による個人評価（現実社会で女性がSTEM系の仕事に就く割合が少ないと、女性はSTEM系の仕事に向いていないとAIが判断するなど）。

原因：安直なレジティマシーの追求？

関連原因：エビデンスの質を測れる専門家の不足

- 問題 3 – 社会に関する科学的思考に関する無理解や統計リテラシー不足
- ①政治家の科学への不信（例トランプ前米国大統領）
- ②マスコミのエビデンスの質への無知
- ③国民の政治不信（例、マイナンバー制度への反発）
- 原因：問題自体が問題の原因である。
- 関連原因：次のスライド

#### 問題4 ー倫理基準の確立の不足（EBPMの社会的価値の問題）

（1）EBPMの「EB」の部分は、目的合理性（政策の有効性をより正確に測定する）という基準が主だが、RCTなど実験が入る場合にはHuman Subjectへの実験調査倫理である

- ①Autonomy（被験者の自律性の尊重、Informed consentの必要性）
  - ②Beneficence（被験者の心のwell-beingへの十分な配慮）
  - ③Non-maleficence（被験者への心理的「無加害性」）、
  - ④Justice（公正性）（例：理由なく対象を男性に限ることは不可など）
- 及び個人情報保護が重視されねばならないとされる。

（2）EBがPMに結びつくところには以下の倫理基準が特に重要

- ①政治および行政における透明性と国民への説明責任（accountability）の重視
- ②国民のウェルビーイングの向上という観点から見た政策目的の正当性
- ③政策に影響を受けるStakeholderたちへの理解増進と説明努力に関する行政の誠実性